蛍宮と真木柱の婚姻

――『源氏物語』における婿選びに際する発言をめぐって――

青島　麻子

一、式部卿宮の言

『源氏物語』若菜巻においては、真木柱巻の後日譚とも言うべき蛍兵部卿宮と真木柱の結婚が描かれている。玉鬘を得た髭黒は、今では「はじめの北の方」（若菜下④一五九）である式部卿宮大君とはすっかり疎遠になっており、二人の間の娘真木柱は母方の祖父である式部卿宮のもとに引き取られていた。祖父式部卿宮、父髭黒いずれの世評も高いため、真木柱への求婚者も多いのだが、式部卿宮は、「衛門督を、さも気色ばまば」（若菜下④一六〇）と、柏木にその気があれば婿にと期待をかけていた。しかしながら、柏木自身は「猫には思ひおとしたてまつるにや、かけても思ひよらぬ」（若菜下④一六〇）と、形代として得た女三の宮の猫に夢中で見向きもしない。そのような中、依然独身であった蛍宮が真木柱に求婚をし、式部卿宮はこの申し出を承引する。蛍宮は、あまりにも容易に許可されたことで却って物足りなくも思うのだが、式部卿宮家の声望を考えると今更言い逃れもできず、真木柱のもとへ通い始めるのであった。

以上が蛍宮と真木柱の婚姻成立に至る経緯であるが、ここで、蛍宮の求婚を受け入れる際の、左記の式部卿宮の台詞に着目してみたい。

Ⓐ大宮（＝式部卿宮）、「何かは。かしづかむと思はむ女子をば、宮仕につぎては、親王たちにこそは見せたてまつらめ。ただ人の、すくよかになほなほしきをのみ、今の世の人のかしこくする、品なきわざなり」

（若菜下④一六一）

この式部卿宮の言については、新山春道氏[1]が、親王家が一般臣下を婚姻の対象としていないことの証左として捉えている。氏は、真木柱は「式部卿宮の差配のもとに式部卿宮家としての婚姻をすることになった」のであり、宮家の婚姻とは、引用Ⓐにあるように、「婚姻対象を帝、及び親王に限ったものであった」と論じる。氏の調査によれば、平安初期から院政期前までの二世女王七五例[2]中、皇族出身ではない一般臣下との婚姻は、比率にすると独身（四七例）の次に多くを占める一八例存在するが、そのうち半数以上の一〇例が父親王の死後または出家後に行われているものであり、「生前に父親王の裁可を得てなされた正式な儀式婚は、例外的なもので、親王家の後見の問題や、政治意識などが推測される場合」で、「父親王生前の婚姻であっても、格の低い親王家では臣下の威勢の前に屈した形の黙認や追認などもみとめられるが、あくまでも親王家は、一般臣下を婚姻の対象としてはいない」と主張する。

一方で虚構の作品である『源氏物語』においては、二世女王九名[3]中一般臣下との婚姻は一例のみ（髭黒・式部卿宮大君）、侵入による事実婚においても接近する人物は親王（匂宮・宇治中の君）や一世源氏（光源氏・末摘花）などと、「史実以上に理想化された世界」となっているという。そして、物語中唯一の例外となった一般臣下と二世女王との婚姻が、真木柱の両親でもある髭黒と式部卿宮大君なのであるが、その婚姻を許可した父親王式部卿宮でさえも、引用Ⓐのように、ただ人を退け、親王を婿取ることを望ましいと見なしているのであり、「これは、柏木に顧みられなかった代わりに蛍兵部卿宮で妥協しようとする強弁ではあるが、これをもって自らを納得させていこうとするのであるから、それだけの力のある原則論であった」というのである。

二世女王と藤原氏の婚姻は、その実効性はともかくも法的には許可されていた[4]のだが、氏の指摘通り、その実態としては一部の権門にのみ見られるかなり限定的な婚姻であったことは認められよう。しかしながらここで注意しておきたいのが、確かに真木柱は式部卿宮の差配のもと結婚しているとはいえ、親王女ではないということであり、式部卿宮の言を親王家の婚姻の「原則論」としての発言と見なすのには慎重になるべきであろう。

物語の記述に戻ると、式部卿宮の発言は新山氏自身も述べている通り、そもそも柏木に顧みられなかった代わりの強弁以上のものか疑わしい。式部卿宮は引用Ⓐで、「かしづかむと思はむ女子をば、宮仕につぎては、親王たちにこそ

は見せたてまつらめ。」と、女子の処遇としては入内を第一と見なす発言をしていた。宮の娘である式部卿宮中の君が王女御として冷泉帝のもとへ入内していることを考慮に入れれば、宮自身の志向としてそれなりに説得力のある言でもあろうが、真木柱の処遇に関して見れば、真っ先に一般臣下である柏木との縁組を想起していたのであり、東宮への入内など「宮仕」が検討されたという記述はない。やはりここは、柏木婿取りを断念せざるを得なかった状況下で、蛍宮から求婚されたことにより当初の計画を翻し、一般臣下に比しての皇族の価値をことさらに述べ立てることで、自身を納得させようとした発言だと解すべきであろう。

『源氏物語』においては、登場人物の口を借りてしばしば理想の配偶や結婚観が述べられることがあるが、それをもとに平安朝の婚姻慣習を炙り出そうとするのではなく、このような記述の描かれ方をこそ問題にすべきであろう。すなわち本稿では、引用Ⓐの式部卿宮の発言から親王家の婚姻の原則を探るのではなく、実直な「ただ人」よりも「親王」という高貴性を優先すべしというようなこの記述が、物語においてどのような意味を持つのか検討し、蛍宮と真木柱の結婚記事の位置づけを探ってみたいと思うのである。更にこれを手がかりに、婿選びに際して物語で反復して述べられる、好色だが身分高い男と平凡だが実直な男のどちらがよいのか――換言すれば、身分と愛情のいずれを重視するか――という発言が、物語展開に関わる方法となっていることを考察してみたい。

二、代替わり記事

まず、蛍宮と真木柱の結婚記事の置かれる位置に着目してみよう。若菜下巻の冒頭は、上巻末尾の記述に直接連接している。六条院での蹴鞠の際に女三の宮を垣間見し、いっそう恋慕の情を募らせた柏木が、宮の乳母子である小侍従に文を送ったところで上巻は閉じられているのだが、下巻は小侍従の返事を得た柏木の様子から語り出され、いよいよ煩悶する姿が描かれていく。物思いに沈む柏木の、光源氏に対する「なまゆがむ心」（若菜下④一五三）や「おほけなき」（若菜下④一五五）思いなどの不穏な予感を孕みつつ、女三の宮の猫を代償として愛玩する記述をもって狂乱する柏木の記事はここで一先ず休止し、一転して、玉鬘と髭黒・式部卿宮家の人々の動向が語られ始める。

一方、蛍宮と真木柱の結婚記事に続けては、「はかなくて、年月も重なりて、内裏の帝御位に即かせたまひて十八年にならせたまひぬ。」（若菜下④一六四）と、四年の空白が置か

れ、冷泉帝から今上帝への代替わりと、それに伴う政界人事の異動が語られる。その後、住吉参詣や女楽などの華やかな行事に続き、物語は紫の上発病へと展開していく。

このように蛍宮と真木柱の結婚記事は、正常心を失いつつある柏木のさまと、代替わりの記事に挟まれて置かれている。猫を愛玩する姿が語られて以来、物語の表舞台から一旦退いていた柏木の再登場は紫の上発病後であり、以降女三の宮との密通へと物語は一気に進むのであるが、真木柱結婚の挿話や代替わり記事は、一見、この女三の宮物語の流れを分断しているようにも見えよう。しかしながら、これらの記事は決して女三の宮物語と無関係に置かれたものではないと思うのである。

まずは代替わり記事について検討してみよう。縄野邦雄氏[5]も指摘するように、物語における過去二回の代替わりとは、主人公光源氏にとって須磨退去と京復帰などの大きな変動を伴うものであった。しかしながら、物語中最後の代替わりである当場面においては、以下の傍線部のように、代替わりにも関わらず政界に特段の変化はないと語られる。

世の人、（冷泉帝ガ）飽かず盛りの御世を、かくのがれたまふことと惜しみ嘆けど、春宮もおとなびさせたまひにたれば、うち継ぎて、世の中の政などことに変るけぢめもなかりけり。（若菜下④一六四～一六五）

実際、この記述に続けて多くの人事異動が述べられるのであるが、光源氏にとって養女の婿にあたる髭黒が右大臣となって太政大臣致仕後の政権を掌り、息子夕霧も大納言に昇進、娘明石女御所生の皇子が立坊と、冷泉帝治世下と同様、光源氏の権勢にも変化はないように見える。

しかしながら、物語は表面上変わらぬ光源氏の栄華の記述に続けて、その内面の苦悩を指摘する。

六条院は、おりゐたまひぬる冷泉院の御嗣（つぎ）おはしまさぬを飽かず御心の中に思す。同じ筋なれど、思ひ悩ましき御事なうて過ぐしたまへるばかりに、罪は隠れて、末の世まではえ伝ふまじかりける御宿世、口惜しくさうざうしく思せど、人にのたまひあはせぬことなればいぶせくなむ。（若菜下④一六五～一六六）

光源氏は、冷泉帝の在位中にその出生の秘事などが暴かれることもなかったことに安堵しつつも、帝が子を儲けぬまま退位したことでその血筋が絶えることを嘆くのであるが、このようなことは他人に打ち明けられることではないので、自らの心の内に鬱屈とした思いを抱えるばかりであるという。

心底に憂愁を抱えるのは、紫の上に関しても同様である。

姫宮（＝女三ノ宮）の御事は、帝、御心とどめて思ひきこえたまふ。おほかたの世にも、あまねくもてかしづかれたまふを、対の上の御勢ひにはえまさりたまはず。年月経るままに、御仲いとうるはしく睦びきこえかはしたまひて、いささか飽かぬことなく、隔ても見えたまはぬものから、「今は、かうおほぞうの住まひならで、のどやかに行ひをもとなむ思ふ。…」とまめやかに聞こえたまふをりをりあるを、

（若菜下④一六六～一六七）

新帝となった今上帝は、姉妹である女三の宮に心配りをしており、そのため宮は世人からも重んじられているという。けれども、そのような女三の宮も、「対の上の御勢ひにはえまさりたまはず。」と、紫の上の勢威には及ばないことが明言される。光源氏と紫の上の夫婦仲は、代替わりの後、帝の姉妹として女三の宮の重みが増したことにも影響されず、時が経つにつれて二人の仲は一層睦まじいものとなっていったというのである。

しかしながら、そのように紫の上の変わらぬ境遇が語られつつも、傍線部のように逆説の接続助詞によって一転し、その表面的な栄華とは別に、「おほぞうの住まひ」を離脱したいという彼女の出家の志がここで初めて語られる。女三の宮との結婚によって却って光源氏の愛情が深まったという事実は、紫の上を充足させるものではなかったのである。加えて、紫の上の優位が語られた上でその出家の希望が述べられていることは、彼女の苦悩は妻としての地位などという次元を超えていることを示唆しているのであろう。従来、紫の上は正妻か否かという問題をめぐっては議論が絶えず、未だ決着を見ないところではあるが、物語がそのような点を問題にするような描き方をしてはいないところにこそ注目するべきなのである。

以上のように、代替わりは光源氏の栄華や紫の上の境遇に、表面上は何ら変化をもたらさなかった。しかしながらその内実はというと、両者とも人には話せぬ深い苦悩を抱えていたのである。光源氏が冷泉帝退位を受け藤壺との密通を想起する点や、光源氏からの変わらぬ愛情を受ける紫の上が初めて出家を願い出る点など、代替わり後の物語は、これを端緒として紫の上発病や女三の宮の密通といった今後の事件に深く関連する両者の心中思惟を紡ぎ出しており、女三の宮物語において重要な役割を担っていると言えるだろう。

三、光源氏の身分の捉え返し

さてそれでは、このような代替わり記事直前に置かれる蛍宮と真木柱の結婚記事についてはどうであろうか。清水好子氏[6]は、この記事をもって若菜巻頭から続く時間が閉じていることを指摘するが、そのような閉じ目に置かれる当該場面においても、若菜巻のあり方と無関係なところに存在しているのではない。これについては、真木柱の結婚を女三の宮の結婚と密接な関係を持つものとして見る説[7]もあるが、ここでは引用Ⓐで語られたような婿選びの際の身分と愛情に関する発言に着目して考察してみたい。

ここで一旦視点を移し、先行研究でも既に多く論じられているところ[8]ではあるが、若菜巻において「ただ人」か否かをめぐって光源氏の地位が揺さぶられている点について見てみようと思う。若菜巻頭に語られる女三の宮の処遇問題に際して、朱雀院は「ただ人の中にはありがたし」（若菜上④二七）と述べ、中宮以下高貴な女御たちが侍る冷泉帝への入内や、漸く雲居雁との結婚が成ったばかりの夕霧との結婚の可能性を否定した上で、光源氏を第一候補として検討を重ねていく。光源氏については、紫の上をはじめとする女性たちの存在が懸念されており、左中弁や乳母も危惧するところであったのだが、しかしながら朱雀院は結局、

Ⓑ（朱雀院）「…昔も、かうやうなる選びには、何ごとも人にことなるおぼえあるに事よりてこそありけれ。ただひとへにまたなく用ゐむ方ばかりを、かしこきことに思ひ定めむは、いと飽かず口惜しかるべきわざになむ。…」（若菜上④三五～三六）

と、娘一人のみを大切にする点よりも「人にことなるおぼえ」を優先したのであった。

その他女三の宮の婿がねとして、蛍宮・藤大納言・柏木なども名乗りを挙げるが、朱雀院の息子東宮（後の今上帝）が、「人柄よろしとても、ただ人は限りあるを、なほ、しかし思し立つことならば、かの六条院にこそ、親ざまに譲りきこえさせたまはめ」（若菜上④三九）と進言し、この言葉が朱雀院の迷いを吹き消し、光源氏への正式打診に至る。この時点で東宮はわずか一三歳に過ぎぬはずであり、少々年齢にそぐわぬ発言とも言えようが、多少の無理を押しても、次代の帝たるべき東宮が、内親王の結婚相手として「ただ人は限りある」と明言することに意味があるのだろう。このように、朱雀院方が女三の宮を光源氏へ託すことを決定した根拠は、準太上天皇である光源氏の「ただ人」ならざ

る身分にこそあったはずであった。

けれども、女三の宮との結婚が決定し、いざ六条院に宮を迎え入れる際には、「ただ人におはすれば、よろづのこと限りありて」（若菜上④六二）と、語り手によって光源氏が「ただ人」であると断言されてしまう。更には柏木が語る朱雀院の台詞においても、光源氏は「ただ人」と見なされる。若菜下巻冒頭で猫を愛玩する姿が描かれて以来、久方ぶりに再登場した柏木は、中納言に昇進し、更衣腹ではあるが女三の宮の姉に当たる皇女（落葉の宮）を妻としていた。しかしながら、「なほ、かの下の心忘られず」（若菜下④二一七）と、依然として女三の宮への恋慕の情は絶えていないことが語られ、小侍従を相手に、女三の宮が光源氏の多くの妻たちに圧され、孤閨を託つ折々も多いという報告を聞いた朱雀院の反応を、伝聞として以下のように語る。

（柏木）「…人の奏しけるついでにも、（朱雀院ハ）すこし悔い思したる御気色にて、同じくは、ただ人の心やすき後見を定めむには、まめやかに仕うまつるべき人をこそ定むべかりけれ、とのたまはせて、女二の宮（＝落葉ノ宮）のなかなかうしろやすく、行く末長きさまにてものしたまふなること、とのたまはせけるを伝へ聞きしに、…」（若菜下④二一八～二一九）

朱雀院は、娘を光源氏に託したことを後悔し、同じ臣下ならば誠実な男性を選ぶべきであったとして、柏木と結婚した落葉の宮の方が却って安心だと述べたというのである。前述のように、当初朱雀院は「ただ人」ならざる光源氏の身分を重視し、引用Ⓑでは「ただひとへにまたなく用ゐむ方」よりも「何ごとも人にことなるおぼえ」を優先していたはずであるが、ここでは柏木の伝える院の発言ではあるものの、光源氏を「ただ人」と捉え直し、一転して「まめやかに仕うまつるべき人」に価値を見いだしているのである。ここで柏木は、同じく皇女と結婚した「ただ人」ということで、光源氏と同一俎上に自らを置いたのであり、それに続けて「世はいと定めなきものを」（若菜下④二二〇）などと、自身と女三の宮の結婚の可能性を探るような発言をなしつつ、女三の宮の側近くで直接胸の内を打ち明けたいと懇願、遂に小侍従から手引きの承諾を引き出すに至るのである。

このように女三の宮の処遇問題をめぐっては、朱雀院方によって男の身分と愛情いずれを重視すべきかの問いが繰り返されることにより、物語の展開を切り開いていた。すなわち、光源氏の好色心を不問に付し、「人にことなるおぼえ」に価値を見いだす朱雀院の言が、光源氏と女三の宮の

結婚へと繋がり、また一方で、光源氏の「人にことなるおぼえ」を棚上げし、同じ臣下として誠実さを求める院の言の伝聞が、柏木と女三の宮の密通を手繰り寄せていたのである。

四、親王の価値の捉え返し

蛍宮と真木柱の結婚記事においても、「ただ人」をめぐる光源氏と同様、「捉え返し」が指摘できないだろうか。前掲引用Ⓐで、式部卿宮は「ただ人の、すくよかになほなほしき」者に比して親王という身分に重きをおいていたのであるが、いざ蛍宮との夫婦仲が芳しくないと見るや、以下のように棚上げしたはずの二心の問題が、式部卿宮の妻大北の方の言葉により再び呼び起こされるのである。

（式部卿宮大北ノ方）「親王たちは、のどかに二心なくて見たまはむをだにこそ、はなやかならぬ慰めには思ふべけれ」（若菜下④一六三）

大北の方の批判は、自身が親王の妻である彼女の、皮肉とも言うべき発言であろう。特に「二心なし」については、夫の他妻を許さず未だ継子紫の上を憎む彼女の、当てこすりとも言えるだろうが、ここで「ただ人の、すくよかになほなほしき」者と異なっていたはずの親王の価値が、「はなやかならぬ」と転換され、「のどかに二心な」きことが唯一の取り柄であると述べられるのであった。

ところで、前記の新山春道氏が真木柱の婚姻を「親王家としての婚姻」と考えたように、当該場面において「親王」という身分の強調が見られることは認められよう。引用Ⓐにおいては、婿としての親王の価値が述べ立てられており、またそう主張する式部卿宮自身が他ならぬ親王であり、しかも「東宮を除く最上席親王」が任じられる式部卿[9]の官職にあった。更に、当該場面においては引用Ⓐをはじめとして三例、式部卿宮を「大宮」と呼称した用例が見いだせることにも着目したい。

式部卿宮に対する「大宮」の呼称[10]はこの場面のみであり、「蛍兵部卿宮と区別するための呼称」（『新編日本古典文学全集』頭注）などとの説明がなされてはいるものの、そもそも単に宮同士の識別のためならば「式部卿宮」もしくは当該場面にも登場する「祖父宮（おほぢ）」（若菜下④一五九）などの呼称でもよいと思われる。他の物語を参照しても、男性を対象とした「大宮」呼称は異例であり[11]、わざわざこの呼称を用いたことには、単なる蛍宮との識別に留まらない意味があろう。平安朝物語における「大宮」呼称の対象人物としては、その殆どが后（すなわち帝の妻もしくは母）であり、

それ以外の人物も帝の姉妹であること[12]を考慮に入れれば、ここでも式部卿宮を「大宮」と呼称することで、帝、すなわち甥に当たる冷泉帝との近縁を我々に意識させているのではないだろうか。

加えて当該場面においては、式部卿宮が世間の評判も高く、冷泉帝からの信頼も厚いことや、光源氏・太政大臣に次ぐ権勢家であり、まさに当代の重鎮であることが記述され、その重い位置づけが示されていた。ここで、蛍宮の「親王」という身分の高貴性に価値を見いだし、堅実な臣下に優るとした式部卿宮の判断は、大北の方により、華やかな生活のできない親王の価値は二心なきところにあると捉え返されるのであるが、真木柱結婚に先立ち、式部卿宮の重い位置づけをことさらに記すことで、帝とも密な間柄であり、光源氏らに次いで「人も参り仕うまつ」る（若菜下④一六〇）存在のはずの式部卿宮の妻が、親王を「はなやかならぬ」と断じる点が際立つのである。

蛍宮と真木柱の結婚成立の後、物語は唐突に蛍宮の亡妻への思慕の念を語る。亡妻の面影を求める蛍宮は、真木柱のもとへは「通ひたまふさまいとものうげなり。」（若菜下④一六二）という状態であり、それが式部卿宮一家や実父髭黒の悲嘆や不満、更には玉鬘においては自身の身の処し方への安堵の思いなど、周辺人物の様々な思念を引き起こしていた。一方、蛍宮自身も真木柱のことは「心苦し」と感じていたのだが、上記の大北の方の批判を耳にすることで、ますます通いは滞りがちになるのであった。

このように、その通いの間遠さを「二心」ゆえとして批判する大北の方らと、亡妻追慕の念に囚われる蛍宮との意識のずれが描き出されている点は注目に値しよう。今井上氏[13]は、様々な見解に揺さぶられ、二者択一的な議論を無効にするような若菜巻のあり方を指摘し、物語が「多様な解釈を許すものとして「女三宮降嫁」の一件を構えている」と論じるのだが、蛍宮と真木柱の結婚記事についても、このような若菜巻のあり方と無縁ではなかろう。蛍宮の「親王」という身分の高貴性に価値を見いだし、堅実な臣下に優るとした式部卿宮の判断は、大北の方により、華やかな生活のできない親王の価値は二心なきところにのみあると捉え返される。けれども、唐突な蛍宮の亡妻追慕の記載により、大北の方が捉え返してみせたその認識にもずれがあることが示唆されるのである。

真木柱の結婚記事は特に掘り下げられることもなく、真木柱巻の後日譚を語る短い挿話として閉じられるのだが、以上のような価値の転換や解釈のずれに着目すれば、「ただ

人」の語を鍵語として光源氏の地位を揺さぶり物語を展開していた女三の宮物語の手法が、当挿話にも集約的に示されていると言えないだろうか。代替わり記事が、光源氏による藤壺との密通想起や紫の上の出家願いといった、今後の事件に深く関わる両者の思惟を引き出していた点は前述したが、その代替わり直前の「閉じ目」に置かれた蛍宮と真木柱の結婚記事についても、若菜巻の物語の方法と分かちがたいものとなっていたのである。

五、身分と愛情の問い

以上、蛍宮をめぐる婿としての親王の価値についての発言に着目し、蛍宮と真木柱の結婚記事と若菜巻の論理との関わりを指摘してみた。当該場面では、式部卿宮により「すくよかになほなほしき」ただ人とは異なるとされたはずの親王の価値が、一転して妻大北の方によって、親王は「はなやかならぬ」存在で「二心な」きことがせめてもの代償であると転換される。このように、婿としての価値を繰り返し問うことで、一旦は不問に付したはずの側面に再度光を当て、また別の側面を棚上げするなどとの多角的な視点が呼び込まれ、物語の展開を切り開いていると言えるだろう。

同様に、朱雀院方により男の身分と愛情のいずれを重視すべきかの問いが反復されることで、女三の宮物語のその後の展開が手繰り寄せられていた点は前述の通りであるが、最後に、これらと同じく物語の方法として理解できる、娘六の君の婿選びに際しての夕霧の記述について、簡単に触れておきたい。

（夕霧心中）さばれ、なほざりのすきにはありとも、さるべきにて御心とまるやうもなどかなからん、水漏るまじく思ひ定めんとても、なほなほしき際に下らん、はた、いと人わろく飽かぬ心地すべし、など思しなりにたり。（宿木⑤三八〇）

夕霧は、いくら水も漏らさぬような深い情愛を抱く男が相手でも、平凡な身分の者と娘を娶せるのは体裁が悪く不満であるとして、匂宮の好色心を不問に付すのだが、夕霧のこの思考の背景には、自身の権勢への自負があろう。実際、匂宮も「親王たちは、御後見からこそともかくもあれ。」（宿木⑤三八一）との明石中宮の言葉の前に、「げに、この大臣（＝夕霧）にあまり怨ぜられはてんもあいなからん」（宿木⑤三八一）と思い直し、遂にその縁組を承諾するに至ったのであった。

匂兵部卿巻では「次の坊がね」は匂宮の同母兄二の宮と

され、匂宮は父帝・母中宮の寵愛を受けながらも、気楽な生活を送る皇子と語られていた（匂兵部卿⑤一八）。しかしながら、総角巻で中の君との恋が本格的に開始すると、突如として次期東宮候補と造型され直され[14]、重々しい身分ゆえに宇治行きが困難とされるとともに、その坊がねとしての立場から、後見となるべき当代一の権力者夕霧との縁組も派生してくる。以上のような匂宮の造型の変化は、宇治への通いの間遠さと権勢家との縁談を引き起こし、大君の苦悩を深め死に至らしめられる役割を負っていたのだが、前引の夕霧の心中思惟は、匂宮の好色も、夕霧の勢威の前では簡単に不問に付され得るものに過ぎないということを示唆し、匂宮の「月草の色なる御心」（総角⑤二九八）への悲嘆のあまり落命した大君の姿を相対化するものとなっていると言えよう。このように、好色心への懸念よりも男の高貴性を重視した夕霧の判断も、宇治の物語を相対化する宿木巻の方法と深く関わるものとして解することができるのである。

以上見てきたように、『源氏物語』においては、しばしば、好色の懸念はあれど人品優れた人物か、平凡だが二心ない人物かの問いが女の親により持ち出され、多妻や二心を危惧する思いはその男の魅力によって不問に付されていた。本稿では、蛍宮と真木柱の結婚記事が若菜巻のあり方と連関するものであることを考察し、その検討を通じて、婿選びの際に反復して述べられる上記の記述が、物語展開を切り開く仕組みとも言えることを確認した。このように、「親王」にしても「ただ人」にしても、その両価性を意図的に利用していくことが、第二部以降の物語の重要な方法の一つとなっているのであるが、このような両価性の利用が、婚姻に際する場面で特に見いだされることには留意すべきであろう。

『源氏物語』の成立した一一世紀前後は、父権の増大や官職の世襲化などの時代的転換点にあり、家父長主導での儀式婚の広がりや、正妻と妾妻の地位の隔絶など、その変化は特に婚姻の様相において顕著であった。物語は、婚姻において家格や身分がより重視されるようになってきた如上の時代状況を敏感に感じ取ってはいるものの、一方で前述来のように、「親王」や「ただ人」という身分をめぐる揺れを、物語展開の方法として巧みに利用していたのである。ここでは、婿選びに際しての式部卿宮の発言を端緒として、物語で述べられる理想の配偶や結婚観に関する記述を、歴史的実態に還元するのではなく、物語を紡ぎ出していく仕組みとして捉え返してみた。

※『源氏物語』の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）により、巻数及び頁数を示した。

【注】

（1）新山春道「二世女王の婚姻―朝顔の姫君を中心に―」（『中古文学』六七号、平成一二年五月）、同「式部卿宮家の婚姻」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識　三四若菜下（前半）』平成一六年五月）。

（2）新山氏前掲「式部卿宮家の婚姻」による数値。「名前とその父親王が確認出来る二世女王七四名」に、入内の後藤原実資と結婚した婉子女王の重複を含める。以下、入内四例、皇族との婚姻三例、賜姓源氏との婚姻三例と続く。その内訳は同氏前掲「二世女王の婚姻―朝顔の姫君を中心に―」に詳しい。

（3）新山氏は、「親王家が自家の女子として父宮裁可のもとでなした婚姻ではな」い紫の上と浮舟については二世女王の人数から除外している。

（4）「詔曰。云々。見任大臣良家子孫。許レ嫁二三世已下王一。但藤原氏者。累代相承。摂政不レ絶。以レ此論レ之。不レ可レ同レ等。殊可レ聴レ娶二二世已下王一者。云々。」（新訂増補国史大系『日本紀略』延暦一二年九月一〇日条）。またこの詔については、安田政彦「延暦十二年詔」（同『平安時代皇親の研究』吉川弘文館、平成一〇年）、栗原弘「皇親女子と臣下の婚姻史―藤原良房と潔姫の結婚の意義の理解のために―」（『名古屋文理大学紀要』二号、平成一四年四月）。

（5）縄野邦雄「若菜下巻の代替りについて―真木柱巻の後日譚との関係を中心に―」（『中古文学論攷』一四号、平成六年三月）。

（6）清水好子「若菜上・下巻の主題と方法」（同『源氏物語の文体と方法』東京大学出版会、昭和五五年）。

（7）柳町時敏「螢宮」（秋山虔編『別冊国文学一三　源氏物語必携Ⅱ』学燈社、昭和五七年）、阿部好臣「螢兵部卿宮の位相」（『語文』八三輯、平成四年六月）。柳町氏は、蛍宮と真木柱の結婚を「女三の宮物語のもたらしたもう一つの悲劇」と位置づけ、藤壺と縁続きの女三の宮を得た光源氏の不幸が、当該場面に凝縮されているとする。

（8）山本佳津江「光源氏世界の終着点―「ただ人」の語が示唆するもの―」（『平安朝文学研究』復刊九号、平成一二年一二月）、浅尾広良「昼渡る光源氏―女三宮との婚姻儀礼―」（同『源氏物語の准拠と系譜』翰林書房、平成一六年）、今井上「若

菜巻の主題的変容―光源氏の相対化をめぐって―」（『日本文学』五七―二号、平成二〇年二月）など。

（9）藤本勝義「式部卿宮―「少女」巻の構造―」（同『源氏物語の想像力―史実と虚構―』笠間書院、平成六年）、安田政彦「平安時代の式部卿」（同『平安時代皇親の研究』吉川弘文館、平成一〇年）、袴田光康「『源氏物語』における式部卿任官の論理―先帝と一院の皇統に関する一視点―」（『国語と国文学』七七号、平成一二年九月）など。

（10）土居奈生子「〈大宮〉考―『源氏物語』とその前後―」（『静大国文』四四号、平成一七年三月）、同「源氏物語〈大宮〉考―式部卿宮の場合―」（『古代中世文学論考』一九集、新典社、平成一九年）など一連の研究に詳しい。

（11）平安朝物語においてはこの他に、『落窪物語』における唯一の「大宮」用例の「故大宮」（巻三・二一三）が男性を指す例と解せるのみである。但しこれについては解釈が分かれるところであり、「大宮」＝女性と見なし、落窪の君の祖母宮と見なす注釈書が多い（柿本奨『落窪物語注釈』・『新全集』・『新大系』）ようだが、室城秀之訳注『落窪物語』（角川ソフィア文庫、平成一六年）の指摘のように、「母方の祖父なりける宮」（巻三・二一二）を「故大宮」と同一人物と捉えておきたい。

（12）列挙すると、『落窪』「故大宮」、『うつほ』正頼妻・嵯峨院后、『源氏』左大臣妻（葵の上母）・弘徽殿大后・式部卿宮・明石中宮、『寝覚』大皇の宮、『狭衣』嵯峨院皇太后・堀川の上・嵯峨院中宮。

前述『落窪』の用例と今回問題にしている『源氏』式部卿宮の例を除くと、『うつほ』正頼妻・『源氏』左大臣妻・『狭衣』堀川の上が帝の姉妹（堀川の上は狭衣即位後は帝の母として皇太后に据えられる。但し「大宮」呼称の用例は狭衣即位以前のものも存する）、残りは全て后。因みに歴史物語においては、『栄花』では彰子・妍子・威子・禎子内親王・章子内親王、『大鏡』では彰子と、全て后を対象として用いられている。

（13）今井上氏前掲論文。

（14）匂宮の次期東宮への据え直しについては、拙稿「宿木巻における婚姻―「ただ人」の語をめぐって―」（『国語と国文学』八五―四号、平成一六年四月）。